遠州三河古寺社巡礼記

八王子市　岡　光子

この度の巡礼は高尾山中興開山六百四十年記念、新造立御前立御本尊・飯縄大権現の開眼法要及び特別大護摩供の厳修を受けてのもので、高尾山にゆかりのある遠州三河の古寺社巡礼となった。

高尾山の巡礼会は、先達の堀江承豊師をはじめとし、原秀誠師、杉山宗聖師、松本・兎川霊瑞寺の御住職・細萱仙秀師ご夫妻のお世話になり、最初の巡礼として、山全体が御神体である、秋葉山本宮・秋葉神社（上社）へ正式参拝したのである。

樹海と雲海に浮かぶ上社の境内からは、はるか遠州灘を見晴るかすことができ、神門には青龍・白虎・朱雀・玄武の四神の霊獣が刻まれていた。

神門の聖獣白虎

大夕焼け

ちなみに秋葉神社は全国に二万数千ヶ所も分祀され、講を組んでお伊勢参りのように秋葉神社へ、大勢の参詣者がお参りをしたという。

これは、江戸時代の歌川広重の東海道五十三次之内、掛川秋葉道追分の図でそれが知れる。東西南北・四方・八方・十方から参詣の人が絶えず、当時の盛況振りを伺うことが出来た。

又、一八四〇年（天保十一年）に出された人気番付『大日本神社仏閣参詣所相撲』には伊勢神宮、高野山が最高位の両大関で、日光東照宮、善光寺が関脇、秋葉山は西前頭四枚目に位置付けられていたという事を、神門の前で神職の方から話を伺った。

江戸時代に大勢の参詣者が訪れるようになった理由としては、都市部への人口密集が進み、頻繁に大火事が起こるようになったため、火防の神への期待が高まったからなのだろう。江戸時代には全国的に庶民の寺社参詣旅行が盛んになり、人々は講を組み参詣者はこの神門を通り、秋葉権現に救いを求めたのである。

この話を聞きながら私は、御嶽山の噴火や鹿児島県・口永良部島の噴火、箱根大涌谷、浅間山の火山の様子に見る破壊と生成の火の神への畏敬の念が深まった。

本殿では正式参拝なので神楽が舞われ、私たちも一緒に神への祈りを捧げたのである。そして宝物殿では、中世から近世にかけて活躍した戦国武将達から奉納された伝来する太刀を拝観し、沢山の寺宝と火防の神のお乗りになる御神輿や「東海道五十三次の名所図会」を拝見することが出来た。

その後、秋葉神社の宮司・川村基夫師の御子息が秋葉権現、飯縄大権現と修験道の事を研究されているので、この秋に八王子・いちょうホールで行われる全国修験道学会に出席されると話された。

名古屋の別格本山・大須観音にて、岡部住職（前列右より5人目）と記念撮影（写真提供・黒瀬幸三郎氏）

秋葉神社の祭神は、火之迦具土大神が祀られている記紀神話に登場する火を司る神で、鎮火・防火の神である。火乃迦具土大神は伊弉諾命、伊弉冉命の子として生まれるが、その誕生の時に、自ら身に纏う炎によって、母である伊弉冉命を焼き、死亡させてしまう。

翌日は袋井市にある、火防総本山・可睡斎を訪れた。このお寺に祀られている秋葉三尺坊は、越後・蔵王権現堂の十二坊の一つで厳しい修行を重ね、秘密の奥義を極め、神通力を得て、観世音菩薩三十三化身の一つとされている。

ちなみに、三尺坊様との御対面は一人ずつとなっているとのことで、厳かな台の上にめいめいが乗り、御本尊に息をかけないように小さな紙を咥えて拝観が許された。

そこでは厳かな大般若経の「転読」がなされていた。これは、三蔵法師・玄奘が天竺（インド）から伝えたお経で、六百巻という大層な分量のお経となっている。全部読誦するのは大変なので、「転読」と言って、大勢の僧侶が経の数行を唱えながら、経本を操る作法を行う。

その時には必ず般若十六善神という、玄奘の天竺渡りを守護した掛け軸を掛け、大般若経の転読を行っていた。

次の巡礼地は寺号を法多山尊永寺と称し、高野山真言宗・別格本山で、御本尊は聖観世音菩薩、また厄除開運の仏様である。御本尊の霊徳は白河天皇、後白河法皇の勅願寺であったということから、民衆の信仰も篤く、門前の厄除け団子はお参りをする人の楽しみにもなっていた。

次に訪れた油山寺にて、宝生殿の寺宝を拝観すると、幕末・維新期に活躍した「三舟」の書も拝観できた。三舟とは「幕末の三舟」と呼ばれており、勝海舟は「智の海舟」で、高橋泥舟は「気の泥舟」と言われ、山岡鉄舟は「情の鉄舟」と言われ、三人共幕臣であったそうだ。

十薬や　増ゆる霊狐の管狐

また豊川稲荷・宝生院では、本殿より奥之院へ通じる参道の両側に祈願の千本幟が立ち並び、樹木の鬱蒼とした境内の奥に、祈願者の名前が描かれた沢山の管狐が祀られている狐塚があった。多くの祈願者の管狐は壮観で思わず手を合わせたくなった。

最後の大須観音は繁華な街中で、浅草寺の浅草観音と同じように大層賑わっていた。又、ここの大須文庫は京都・醍醐寺や、和歌山・根来寺の経蔵と合わせて本朝三文庫とも言われ、真福寺本・大須本と称され、国宝の「古事記」も収蔵されているというお話であった。

高尾山ゆかりの色々なことに触れ、遠州三河古寺社巡礼の旅は無事に終わったのである。

合掌

高尾山　四季の草花　89

クララ　眩草

マメ科・クララ属

この野草の根を噛むと、目が眩むほどクラクラすることから、この名前があります。

別名の「クサエンジュ」は、葉の形が「エンジュ」に似ていることから、名前があります。

茎の先や枝先から花柄を出し、白色から淡い黄色の蝶形の花を多数付け、花の長さは十五ミリ前後で、上方向に反り返っています。

花後、「ササゲ」に似た細長い豆莢を付けます。

葉は十五～四十枚前後の小葉からなる花状複葉で、小葉は細長い楕円形で両面有毛ですが、表面は解り難い。葉は夕方になると閉じる性質があります。

山地の明るい草地や河原に生える高さ八十～百五十センチになるマメ科の越年草です。

根を乾燥したものを生薬では苦参と呼ばれ、健康、利尿、解熱薬として知られています。

天然記念物に指定されている蝶の一種、「オオルリシジミ」の幼虫はクララの蕾を食べます。

（撮影・文　中村　毅人）